

中西派一刀流から 北辰一刀流へ

江戸時代後期の剣術家であり、北辰一刀流の創始者、それが今回の墓の主役、千葉周作だ。

周作の父・幸右衛門は医者だった。千葉家の先祖が武士だったことで、かねてから家名の再興を願っていた。そこで幸右衛門は、義父で元磐城国相馬中村藩の剣術師範の吉之丞に頼み、長男・又右衛門、次男・周作、三男・定吉という三人の息子たちに早くから剣術を学ばせた。

その三人のなかで、たちまち頭角を現したのが周作だった。幸右衛門は剣術修行の邁進させるため、三兄弟を連れて江戸近郊の松戸に移ることとなる。千葉周作十六歳春のことである。

中西派一刀流の浅利又七郎義信について修行した周作は、二十三歳で免許を得ると、後継にしたい浅利の奨めで一刀流中西忠兵衛子正の道場へ通い始めた。

小野派一刀流を継ぐ中西道場には、後に天真一刀流開祖となった寺田五右衛門、天真白井流を興す白井亨や、音無し剣法の高柳又四郎といった使

いがいた。そのため、彼らと剣を合わせることで、さらに腕前をあげた周作は三年の修行を経て免許皆伝。その後は浅利家の養子となって浅利の道場を受け継ぐことになる。

だが、周作の気持ちにはモヤモヤしたものがあった。自分自身の新しい流儀を興したいという思いが鬱勃と沸いていたのだ。

とはいえ、浅利の姪を嫁に迎えている。独立し自らの流派を創るためには、中西派を捨て浅利と縁を切らなければならぬ。気持ちが揺れ動く周作。人生は一度きり。ならば、自分の信じる道を進んでみよう。そんな

な思いから、一刀流の伝書を返上した周作は、妻子を江戸に残し、武者修行の旅に出る。文政三年（1820）、周作二十七歳だった。

周作にとっての一大事はその時。人生を決める決心であり、同時に北辰一刀流の始まりとなったというわけである。



墓が語る 一大事^{十六}

本妙寺 千葉周作

北辰一刀流の開祖、六尺を超える大男・千葉周作。

周作は剣豪だったが、すこぶるつきの教え上手でもあった。合理的な思考に抜きんできて、親念的な思い込みを持たなかった。当時の剣術道場は木刀を用いての稽古だったため、怪我を避けるべく型の教えに特化していた。周作はその稽古方法に疑義を持ち、中西道場に伝わる竹刀と防具を発展させ、立ち合い稽古を盛んにした。そのためもあって、周作の道場玄武館で修行に励む者は、他道場に通う者に比べて技量の進歩が格段に早かった。その剣道思想は現代に受け継がれ、評価が高い。

できないような決まり事が多く、特に一刀流と名が付く道場は、ただでさえ高い敷居をさらに高くしていた。例えば、これまでの一刀流の伝授の階梯は小太刀刃引・仏捨刀・目録・カナ字・取立免状・本目録・皆伝・指南免状の八段階があった。だが、周作はこれを、初目録・中目録免許・大目録皆伝の三段階に簡素化。技の説明も平易でわかりやすいものにした。これにより、他の流派において十年かかる修行が、北辰一刀流の場合、わずか五年で完成する、と言われたほどだった。

さらに、玄武館では防具をつけて竹刀で打ち合う稽古を主とした。それまでの剣道場では、硬い木刀を使っていたため、打ち合うことより、型ばかりを教えていた。

そこで、竹刀と防具を使い、それまで秘伝とされてきた術を万人が分かるように、平易に伝達。つまり、誰にでも分かりやすい普遍的なスタイルへと変えたことで、江戸末期の剣法熱の高まりとも相まって人気爆発。結果、武士だけでなく農工商業者までが数多く押し掛けるようになったのである。

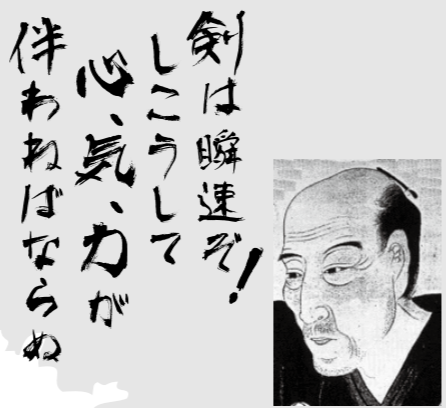
なんでも神田於玉ヶ池の道場は、かつての後樂園球場と同じ一万平方

メートルもあり、門前市を為すほどだったとか。隣には東條一堂の漢学塾「瑤池塾」があり、玄武館で剣術を学んだ後、隣の瑤池塾で詩文・儒学を学ぶというのが、当時の流行だったという。

周作道場の門下生の中には、浪士組幹部の清河八郎や新選組幹部の山南敬助ほか山岡鉄舟が精進に励んだし、間接的には坂本龍馬もいた。龍馬は周作の実弟・定吉が開いた桶町の道場へ入門。千葉道場に通ったことで定吉の息の重太郎に誘われて勝海舟暗殺に向き、逆に海舟に心酔したのは有名な話だ。

天保六年（1835）、周作は門弟・白井新三郎を従えて水戸を訪れ、藩学弘道館で水戸藩士を相手に武技を披露。評判を聞いた徳川斉昭により剣術師範として招聘され、その後、馬廻格百石の水戸藩士として召し出された。弘化元年（1844）五月、幕府の譴責を受け、江戸駒込邸に謹慎の身となった斉昭だったが、その後も、時折周作を召して武芸を観て楽しんだといわれる。

また、斉昭は周作へ直々に中風の灸法を伝授したという。この灸法が弟・千葉定吉に伝えられ、定吉から重太郎・娘さなへ伝授。さなは、この水戸



剣は瞬速ぞ！
しこうして
心、気、力が
伴わねばならぬ

徳川家伝来の灸法を以って、後年、千住に「千葉灸治院」を開き、「千葉の名灸」として評判になったそうだ。

周作がこの世を去ったのは安政二年（1855）、享年六十二だった。とげぬき地蔵で知られるJR巣鴨駅から徒歩10分。駅前の喧騒を抜け住宅街を歩いていくと、染井霊園が見えてくる。その近くに位置する日蓮宗本妙寺が千葉周作の静かに眠る安住の地だ。

同寺は、元亀二年（1571）創建され、明治四十四年（1911）に本郷より移転。境内の墓地には周作のほか、「遠山の金さん」こと遠山左衛門尉景元（7月号参照）や、囲碁家元本因坊歴代の墓なども建つ。また、本堂裏手には明暦三年（1657）正月十八日、病死した娘の供養のために燃やした振袖の火が本

文政五年秋、玄武館を開く
江戸を後にした周作は、武蔵・上野信州、北信濃から諏訪地方などを廻って他流試合に腕を磨き、徐々に門弟数を増やしていった。

周作が江戸に戻った文政五年（1822）秋、日本橋品川町に玄武館という道場を開くほど名を上げ、神田於玉ヶ池に移転の後は多数の門人を抱えるようになった。

周作道場の人気の秘密は、一言でいうなら「誰もが分かりやすく、誰もが参加できる剣法の導入」だった。当時、剣の世界には、素人には理解

堂に燃え移り、それが燃え広がって江戸城本丸を含む江戸市中のほとんどを焼き尽くしたという「明暦の大火」供養塔がある。

周作の亡骸は、当初、浅草誓願寺内仁寿院に葬られた。法号は高明院勇譽智底教寅居士。後に移されたのが、豊島区巣鴨の、ここ本妙寺だった。主に竹刀を使用し、段階を三段階と簡素化。神秘性に偏らない合理的な指導が好評を博した北辰一刀流。その剣技は「技の千葉（玄武館）、力の斎藤（練兵館）、位の桃井（士学館）」と評され、この三道場は後に幕末江戸三大道場と称された。

生涯の門弟数は六千五百人。一人の剣客としては空前絶後の数だった。周作のスタイルが、今の剣道の原型になったことを考えると、功績はあまりにも大きい。